

新刊紹介



橋を透して見た風景

著者：紅林章央
発行：(株)都政新報社
仕様：A5判 288ページ
定価：2,300円(税別)

著者の紅林氏は現役の東京都建設局橋梁構造専門課長で、奥多摩大橋、多摩大橋を始め、多くの橋やゆりかもめ、中央環状品川線の建設に携わってきたという。本書は、『都政新報』誌で2014～2015年に連載されていたものを著者が大幅に加筆するとともに貴重な写真を多数掲載したものである。

徳川家康は江戸に幕府を開府した後、全国の名を結集し、一大土木事業を展開した。人の手で大地を崩し、海を埋め立て、湿地を干拓した。そして、尾根筋、洲、崖地、湧水など土地の豊かなポテンシャルを見極めながら、濠、道、水道、湊、街区などのインフラが次々とつくられていった。その中のひとつに橋がある。

本書では江戸時代から現代までの一橋一橋に焦点を当て、東京の橋の成り立ちから特色、当時の技術者らの情熱や仕事ぶりや震災復興橋梁からの正確な建設経緯についてわかりやすく書か

れている。

例えば▽江戸時代の橋の管理はどうであったか▽文明開化の頃に架けられた石橋やお雇い外国人による西洋式木橋とは▽永代橋や清洲橋はなぜあの形になったのか▽太平洋戦争で橋はどんな影響を受けたのか▽戦後、橋梁建設はどう再開され、技術を進歩させたのか——等。

また、扉の口絵16ページを始め随所に貴重な写真が多数掲載されている。橋に興味のない方も本書を読んでもと橋に魅入られるかもしれない。ぜひ手にとって一読してはどうだろうか。

本書の構成は次のとおりである。

はじめに

- 1章 江戸時代の橋
 - 2章 明治・大正の橋
 - 3章 関東大震災
 - 4章 昭和から太平洋戦争
 - 5章 終戦から現代
- 終わりに